

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 3 0 年度病虫害発生予報第 1 2 号について
平成 3 0 年度病虫害発生予報第 1 2 号を発表したので送付します。

平成 3 0 年度病虫害発生予報第 1 2 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 いもち病	—	2
	2 イネミズゾウムシ	—	2
	3 スクミリンゴガイ	—	2
野菜・工芸作物	1 アブラムシ類	並	2
	2 アザミウマ類、コナジラミ類	—	
施設野菜全般	1 病害全般	—	2
冬春きゅうり	1 べと病	多	3
	2 うどんこ病	並	3
	3 褐斑病	やや少	3
	4 灰色かび病	並	3
	5 黄化えそ病 (MYSV)	前年より多い	3
	6 ミナミキイロアザミウマ	少	4
	7 タバココナジラミ	やや少	4
冬春ピーマン	1 うどんこ病	やや少	4
	2 斑点病	並	4
	3 黒枯病	並	4
	4 ミナミキイロアザミウマ	少	5
	5 ヒラズハナアザミウマ	やや多	5
	6 タバココナジラミ	並	5
冬春トマト	1 灰色かび病	やや少	5
	2 葉かび病	並	6
	3 すすかび病	やや多	6
	4 うどんこ病	並	6
	5 タバココナジラミ	並	6
	6 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並	6
冬春いちご	1 うどんこ病	やや少	7
	2 灰色かび病	並	7
	3 ハダニ類	やや少	7
	4 オンシツコナジラミ	やや少	7
	5 ヒラズハナアザミウマ	多	7
カンキツ	1 そうか病	—	8
	2 かいよう病	—	8
	3 ミカンハダニ	少	8
茶	1 カンザワハダニ	並	8

○作物の生育状況 (3月中旬)

早期水稲は育苗期から移植期、冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマト・冬春いちごは収穫期であった。

○ 4月の気象予報

天気は数日の周期で変わる見込み。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(1か月予報 鹿児島地方気象台3月14日発表)

○発生予報の根拠および防除対策

※平成30年度病害虫防除情報第9号早春期の病害虫対策(3月8日発表)参照

早期水稲

1 いもち病

[防除上の注意]

(1) 補植用の置き苗は、いもち病の発生源となるので早めに処分する。

2 イネミズゾウムシ

[防除上の注意]

(1) イネミズゾウムシに効果のある育苗箱施薬剤を使用していない水田では、発生が目立ち始めたら(10株当たり成虫数5頭)直ちに粒剤の水面施用を行う。

3 スクミリンゴガイ

[防除上の注意]

(1) 用排水路からの侵入を防ぐため、水の出入口にネットを設置する。

(2) 田植後2~3週間は、できるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。但し、低温、寒風時や除草剤散布時は湛水状態を保つ。

(3) 貝の生息が多い場合には、薬剤の本田施用を実施する。

野菜・工芸作物

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

(1) 黄色水盤トラップによる誘殺状況は、平年より少なく推移している。

(2) キュウリ、トマト、ピーマンでは平年並、いちごではやや少の発生状況である。

[防除上の注意]

(1) ウイルス病を媒介するので、早期発見・防除に努める。

2 アザミウマ類、コナジラミ類

[防除上の注意]

(1) 外気温の上昇に伴い、本虫の露地での活動が活発になってきているため、ハウス開口部のネット被覆やほ場周辺の除草管理、施設栽培終了時における蒸し込みの徹底など、本虫の移動拡散を防止する。

(2) 本虫は、各種ウイルス病を媒介するため、防除を徹底する。

施設野菜全般

1 病害全般

今後、気温の上昇に伴い各種病害の発生に好適な条件となるため、気象の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日が多くなり、施設内が多湿になりやすいので、加温機での送風や循環扇を活用する。

きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

冬春きゅうり

1 ベと病 (多)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率：81.8% (平年 55.1%、前年 41.7%) 平年より多

発病葉率：31.9% (平年 14.9%、前年 2.4%) 平年より多

(2) 平成30年12月25日に病虫害発生予察注意報第4号を発表し、防除を呼びかけたが、依然多発生が続いている。

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。

(2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

(3) 多発時はべと病を対象とする専用の殺菌剤を使用し、新葉の展開に合わせて葉裏まで、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。また、多発時の1回散布では、防除効果が現れにくいことがあるので、7日間隔で2回以上の連続防除を実施する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率：36.4% (平年 26.4%、前年 33.3%) 平年よりやや多

発病葉率：3.1% (平年 4.4%、前年 9.7%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

(2) 薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

(3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率：9.1% (平年 27.2%、前年 24.9%) 平年よりやや少

発病葉率：3.3% (平年 3.7%、前年 7.8%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。

(2) 窒素質肥料の多用は、軟弱徒長となるため発病を助長し、逆に少ない場合は草勢低下を招くので、適正な肥培管理に努める。

(3) うどんこ病、べと病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。今月の調査ではうどんこ病、べと病の発生が多かったため今後褐斑病の発生が増加する可能性がある。

(4) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率：0.0% (平年 3.1%、前年 0.0%) 平年並

発病果率：0.001% (平年 0.04%、前年 0.001%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。

(2) 花卉等の発病に注意し、予防及び発病初期の防除を徹底する。

(3) 耐性菌が発生しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 黄化えそ病 (MYSV) (前年より多い)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率：9.1% (前年 0.0%、前々年 21.4%)

発病株率：0.001% (前年 0.0%、前々年 0.2%)

[防除上の注意]

- (1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激にほ場内に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (2) 感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し、埋却処分するか完全に枯れるまで密封処理する。

6 ミナミキイロアザミウマ (少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
 発生面積率 : 45.5% (平年 70.0%、前年 58.3%) 平年より少
 100葉当たり虫数 : 18.0頭 (平年 70.0頭、前年 41.8頭) 平年より少

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (2) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので7日間隔で少なくとも3回の連続防除を行う。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (4) 使用薬剤については、地区の防除暦等を参考にするか、西臼杵支庁・各農林振興局(農業改良普及センター)等関係機関に問い合わせる。

7 タバココナジラミ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
 発生面積率 : 18.2% (平年 28.6%、前年 25.0%) 平年よりやや少
 100葉当たり虫数 : 1.4頭 (平年 3.3頭、前年 0.8頭) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミの早期発見に努めるとともに、栽培期間を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (2) 効果のある殺虫剤が少ないことから発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (3) 施設内外の雑草は、タバココナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

冬春ピーマン

1 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
 発生面積率 : 25.0% (平年 44.8%、前年 41.7%) 平年より少
 発病葉率 : 2.8% (平年 5.4%、前年 5.6%) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

2 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
 発生面積率 : 33.4% (平年 39.0%、前年 16.7%) 平年並
 発病葉率 : 7.2% (平年 4.9%、前年 0.3%) 平年よりやや多

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- (2) 病原菌が植物体に侵入した後では防除効果が上がりにくいので、予防散布を行う。

3 黒枯病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
 発生面積率 : 0.0% (平年 1.4%、前年 0.0%) 平年並
 発病葉率 : 0.0% (平年 0.02%、前年 0.0%) 平年並

[防除上の注意]

- (1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水に努める。
- (2) 発病果・被害茎葉は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。
- (3) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (4) 同一薬剤の連用は、薬剤耐性菌の発生を招く恐れがあるので避ける。

4 ミナミキイロアザミウマ (少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
発生面積率 : 8.3% (平年 34.9%、前年 8.3%) 平年より少
10花当たり虫数 : 0.1頭 (平年 1.1頭、前年 0.1頭) 平年より少

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当たり1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
- (2) ミナミキイロアザミウマのその他の注意事項については、きゅうりのミナミキイロアザミウマ(4ページ)を参照のこと。

5 ヒラズハナアザミウマ (やや多)

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
発生面積率 : 66.6% (平年 44.9%、前年 66.6%) 平年より多
10花当たり虫数 : 9.4頭 (平年 10.1頭、前年 16.8頭) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 主に花の中に生息しているので、薬剤防除は薬液が花の中にしっかり付着するように実施する。多発時は複数回の連続防除が必要である。
ピーマンの花数が減少する時期は防除適期となるので、この時期を逃さず、防除の徹底を図る。
- (2) ミナミキイロアザミウマに対し天敵スワルスキーカブリダニによる防除を実施しているほ場において、ヒラズハナアザミウマの発生が多い傾向にある。生息密度が高まる前に、天敵に影響の低い薬剤を用いた防除を実施する。
- (3) ミナミキイロアザミウマとは薬剤感受性が異なる場合が多いので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

5 タバココナジラミ (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果
発生面積率 : 8.3% (平年 9.3%、前年 16.7%) 平年並
100葉当たり虫数 : 0.1頭 (平年 0.2頭、前年 0.3頭) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ(4ページ)を参照のこと。

冬春トマト

1 灰色かび病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果(株)
発生面積率 : 30.0% (平年 56.8%、前年 70.0%) 平年よりやや少
発病株率 : 1.3% (平年 13.2%、前年 9.8%) 平年より少
3月中旬の巡回調査結果(果実)
発生面積率 : 10.0% (平年 20.3%、前年 30.0%) 平年並
発病果率 : 0.2% (平年 0.9%、前年 0.6%) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) ハウスの換気に努めるとともに、曇雨天日に防除する場合はくん煙剤を使用する等、ハウス内の湿度が高くないようにする。
- (2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2 葉かび病 (並)

※平成30年度病害虫発生注意報第6号(2月27日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 30.0% (平年 26.5%、前年 40.0%) 平年並

発病葉率: 6.0% (平年 3.9%、前年 7.4%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病初期の防除を徹底する。

3 すすかび病 (やや多)

※平成30年度病害虫発生注意報第6号(2月27日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 20.0% (平年 16.5%、前年 20.0%) 平年よりやや多

発病葉率: 2.2% (平年 1.3%、前年 2.3%) 平年よりやや多

[葉かび病・すすかび病の防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

(2) 発病葉は感染源となるため、生育に支障がない限りできるだけ摘葉し、圃場外へ持ち出し適正に処理する。

(3) 発病初期の防除を徹底する。

4 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 10.0% (平年 7.5%、前年 0.0%) 平年よりやや多

発病葉率: 0.1% (平年 0.2%、前年 0.0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。

(2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。

(3) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。

(4) 微生物農薬は予防的効果が主であり、また、ダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

5 タバココナジラミ (並)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 40.0% (平年 39.0%、前年 20.0%) 平年並

100葉当たり虫数: 2.1頭 (平年 1.8頭、前年 0.2頭) 平年並

[防除上の注意]

(1) 冬春きゅうりのタバココナジラミ(4ページ)を参照のこと。

6 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (並)

(1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率: 0.0% (平年 2.6%、前年 0.0%) 平年並

発病株率: 0.0% (平年 0.1%、前年 0.0%) 平年並

[防除上の注意]

(1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

(2) タバココナジラミ(媒介虫)の防除を徹底する。対策は冬春きゅうりのタバココナジラミ(4ページ)を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

(1) 3月中旬の巡回調査結果(葉)

発生面積率: 16.7% (平年 31.1%、前年 8.3%) 平年よりやや少

発病葉率: 1.2% (平年 2.9%、前年 0.2%) 平年並

3 月中旬の巡回調査結果(果実)

発生面積率： 0.0% (平年 15.8%、前年 0.0%) 平年よりやや少

発病果率： 0.0% (平年 1.0%、前年 0.0%) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。
- (3) 親株から苗に伝染するので、親株床・育苗時の防除を徹底する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

2 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率： 8.3% (平年 11.1%、前年 0.0%) 平年並

発病果率： 0.2% (平年 0.4%、前年 0.0%) 平年並

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、換気に努めるとともに、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空中湿度を高めないように留意する。
- (2) 発病果・被害茎葉は、早めに摘除してほ場内に放置しない。
- (3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

3 ハダニ類 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率： 58.3% (平年 78.2%、前年 83.4%) 平年よりやや少

寄生株率： 15.6% (平年 26.0%、前年 24.0%) 平年よりやや少

葉当たり虫数： 1.9頭 (平年 8.3頭、前年 6.6頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- (2) 株整理後の葉数が少ない時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時にはノズルや散布圧を調整して、薬液が葉裏に良く付着するように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。
- (4) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

4 オンシツコナジラミ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率： 8.3% (平年 16.7%、前年 0.0%) 平年よりやや少

葉当たり虫数： 0.1頭 (平年 0.5頭、前年 0.1頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 地域により薬剤感受性が低いオンシツコナジラミが確認されているので、地区の普及指導員や技術員の情報を参考にして防除に努める。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

5 ヒラズハナアザミウマ(多)

※平成30年度病害虫発生注意報第5号(2月27日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率： 58.3% (平年 19.2%、前年 8.3%) 平年より多

寄生花率： 8.7% (平年 3.3%、前年 0.2%) 平年より多

10花当たり虫数： 1.6頭 (平年 0.7頭、前年 0.02頭) 平年より多

- (2) 寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがある。

[防除上の注意]

- (1) 本種の果実への加害は、3～4月以降に顕著に認められるので、低密度時に防除対策を講じる。
- (2) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。
- (3) 青色粘着板を設置し、誘殺による継続的な密度低下を図る。

カンキツ

1 そうか病

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 重点防除時期は、発芽初期・落弁期・幼果期であるが、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、特に発芽初期から展葉期の防除が重要である。

2 かいよう病

[防除上の注意]

- (1) 越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 防除は予防散布が原則である。

3 ミカンハダニ (少)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果

発生面積率 : 16.7% (平年 30.6%、前年 27.8%) 平年より少
寄生葉率 : 0.7% (平年 5.9%、前年 5.0%) 平年より少
100葉当たり雌成虫数 : 0.9頭 (平年 48.4頭、前年 13.8頭) 平年より少

[防除上の注意]

- (1) 本虫の要防除水準は、寄生葉率30%あるいは葉当たり寄生雌成虫数0.5~1頭である。特に、冬季マシン油乳剤を散布できなかつたほ場では発生状況に注意し、要防除水準に達する前の発生初期に防除する。
- (2) 同一薬剤及び同一系統薬剤の使用は年1回が望ましい。

茶

1 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 3月中旬の巡回調査結果 (摘採面)

発生面積率 : 38.5% (平年 42.3%、前年 23.1%) 平年並
寄生葉率 : 2.3% (平年 3.1%、前年 1.2%) 平年並
100葉当たり虫数 : 7.4頭 (平年 11.1頭、前年 2.2頭) 平年並

- 3月中旬の巡回調査結果 (裾部)

発生面積率 : 53.8% (平年 64.7%、前年 38.5%) 平年並
寄生葉率 : 3.2% (平年 8.4%、前年 1.5%) 平年よりやや少
100葉当たり虫数 : 9.8頭 (平年 34.8頭、前年 1.8頭) 平年よりやや少

[防除上の注意]

- (1) 一番茶萌芽期以降発生が多い場合には、農薬使用基準の摘採前日数等に注意して防除する。
- (2) ツマグロアオカスミカメとの同時防除の場合は、ダニを主体とした散布量(400%)とする。
- (3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

○その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会 (J P P - N E T : 会員専用) <http://www.jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センター <http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 短期暴露評価の導入により農薬の使用方法が変更になるものがありますので注意して下さい。
- 4 発生量 (程度) の区分
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅

やや少ない (やや低い) 平年並の外側 20% の度数の入る幅
少ない (低い) やや少ないの外側 10% の度数の入る幅
(平年値は過去 10 年間の平均)

5 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- (1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターではホームページで情報を提供しています。ホームページアドレスは<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。



【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 松浦
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp